

探究する学びと協働：学び合いから生まれるもの

対談

藤原さと（一般社団法人こたえのない学校）
荒木寿友（立命館大学教職大学院）

荒木 それではこれから対談の方に入っていきたいと思います。さとさん、ご講演ありがとうございました。お話の最後にセルフアウェアネスの話が出てきて、非常に興味深かったんですが、その重要性に気付いたのは、探究がうまくいかない事例に出会ったからなんですか。

藤原 Learning Creators' Lab (LCL)という教員の研修をスタートして、今年 9 年目になるんですけども、やっぱり学校の先生たちからうまく行かない理由を聞くことが多いんですね。単学級だったり、管理職が理解してくれるとうまくいくけれども、そうではない時期は、大変なこともあったりとか。あと、やはりとても多いのが、保護者に理解してもらえない、保護者からいろいろ言われることについて心が整えることができないなどの悩みです。

こうした悩みに応えられないかと考えていた時に、時々訪れる、東京のかえつ有明中高の教員のやりとりを思い出しました。面白いんですよ。その学校の教員ミーティングは外部者も参加することができます。私が学校管理職とミーティングしているときも、図書館のオープンスペースでミーティングをして、そこに生徒も入ってきちゃったりします。

なんだ、この学校面白いなって思ったら、SEL に相当するものをずっと実践してきたということを聞いて、一緒に研修をやってみようとなりました。Schools for Excellence (S4E)という研修なのですが、かえつの先生たちと一緒にやって 5 年目になります。

(SEL でグローバルなプレゼンスのある団体) CASEL のフレームワークも見ながら、プログラムをつくってきました。ただ、CASEL のフレームワークはアメリカでできしており、学校側の負担が大きい。日本の教育の今の現状を考えると、忙しい先生たちでも実践可能で、日々が穏やかに変容することができる、セルフアウェアネスに特化したもの

をつくらうとなりました。

荒木 そういうことだったんですね。日本では小泉先生とかがいろんなプログラムつくって、アクティビティーとかも結構ありますね。

さてきょうの対談ですが、一応こんなこと考えてきました。どれからいきましょう。全部できるとは限らないのですが、どれにしましょうか。探究ブームからいきましょうか。

対談のテーマ

- ・ 探究ブーム？について
- ・ 探究の本質 自己との関わりと道徳の関わり
- ・ やらされ探究がやりたい探究になるって？
- ・ 探究と善さのかかわりについて 探究×道徳（ウェルビーイング）
- ・ 今の世の中 社会の分断 民主主義とDE&I ミャンマーについて

探究ブーム？について

この数年特に、公私問わず、小学校・中学校・高校問わず、また学校のカリキュラム改革とかでも「探究」っていうのが出てきて、探究ベースのカリキュラムに変えていきましようっていう私立の学校や、それを売りにしてる学校が増えてきたと思うんです。ただ、その探究の質を見たときに、果たして本当に十分に、先ほどのデューイを参考にしながら、不確定が確定状況になっていくっていうような、あれが探究の核だとは思いますが、そういう探究やそれによって身に付く資質・能力のところが本当に発揮できてるのかどうかっていうところの検証が必要かと思うんです。

特に僕なんかは大学で講義をしていて、総合的な学習の時間の授業担当してるんですけども、「総合、どうでした」っていうふうに学生に聞くと、意見が両極端なんですよ。ね。「ものすごく楽しかった」って言う学生と、「そうでもなかったわ」って言う学生さ

んがいるんです。さとさんも、多くの学校行っていると思うんですが、すごい面白い探究やってるなっていう所と、うーんっていう所の一番の差ってわかりますか。ここがあれば、もっと面白くなるのにとか。あるいは、ここ押さえてるから、ものすごく面白くなってるよなっていう、こういうポイントって何かありますか。

藤原 難しいですね。探究は子どもの声を聴くことが大切なのですが、さっきの話にも重なりますけれども、探究っていいながら、何かのフレームワークに当てはめ、穴埋めさせるようなことになってしまっているケースが多々あります。どこかそこに正解的なものが想定されていると、子ども自身の声を聴くということにつながりにくい。そういう実践を見ることがないとは言えませぬね。

あとは、探究の单元そのものというよりは、やっぱり学級づくりのところで、子どもの声を初めに聴いてあげることができるのかなっていうふうに思うことがあります。

例えば、4月の学級始まりのときに、一般的に欧米の小学校だと、初めの1週間ぐらいは子どもの声を聴くことが中心なんです。いきなり授業をしたりはしません。むしろ自由に子どもたちが力を発揮する姿を見とれる機会を沢山つくります。そういうものが日本の学校は少ないなあと。

荒木 じゃあ、もう探究そのものじゃなくて、学級づくりですね。

藤原 学級づくり、そうですね。

荒木 学級づくり・学校経営。学級集団づくりっていうか、クラスの人間関係をどう構築していくか、それに加えて子どもと教師の関係をどう構築していくかっていうところの丁寧さっていうのが、探究のほうにも関わってるってことになるんですか。

藤原 そうですね。今、トランプがやっているように、学年のスタート時点で「締める」みたいなのあるじゃないですか。締めて、初めに、規範を伝えてから、暮らしをつくっていくやり方です。その方法を、急に変えるっていうことは、とても怖いことじゃないかなというふうに思うんですけれども。「(欧米のように)やってみたら？」っていうのは簡単ですけどね。さまざまな学校環境がありま

すから、そこがすごく難しいところかなとは思ってます。

荒木 さっきの院生の2年間の学びの報告のところで、細見さんが最初は教育技術のところに興味がすごくあったけど、大学院の学びを通して、技術ではなくて、そこを支える背後のところに非常に関心が出てきた。それひっくり返して、全部が教育だっていうような捉え方をしてたのですが、そういったところですよね。教師観というか、教育観みたいなのが、恐らく探究に限らずだと思うんですけれども、全ての教育実践のところにつながってきて、それがうまくいく、いかないってところにつながるのかなっていう感じがします。そうすると、やはり教師が学級づくりの責任者として自己開示して子どもに安心してもらうことも大事になってくるんですかね。

藤原 教師の自己開示もそうですね。あと、探究学習の場合は実際に子どもたちが学びを進めていくと、教師が知らないこととを持ち込んだり、教師より技能的に高いことをやってしまう生徒が出てきます。探究学習において、ああ、面白い実践してるなっていう学校や学級では、生徒が教員をどんどん飛び越えていってるんですよね。そこに対して、教員が「それ面白いね」「それどうやってやるの?」「知らなかったよ」などと言っている。そんな教室は生き生きしてるし、学びも進んでいる感じがしますね。

荒木 面白い。ではここで、お隣の方とお話をしてみませんか。ずっとインプットが続いてますので、アウトプットの時間を少し取りますので、別に隣の人としゃべりたくない人はしゃべらなくていいんですけども、しゃべってもいいよっていう方いましたら、ちょっとお隣の人とお話をしてみてください。先ほど、藤原先生のご講演で感じたことであったりとか、私、こういうこと経験したことあるわっていうようなことをまずは自己紹介して、どうでしたっていう形で感想交流してみてください。

荒木 ありがとうございます。この間にご質問のほうが挙がってきました。一つ取り上げてみますね。「探究ブームに関わって、現在、いろんな意味で『探究』という言葉が使われているように感じています。本日前半のお話で少し触れられていましたが、藤原さと先生

についての『探究とは』ということをお聞きしてみたいです。また、その答えに変遷があったとしたらそれも含めて伺えるとありがたいです。」では、この問いにお答えしていただけますか。

藤原 活動をスタートして12年目になるんですけれども、始めた当時は、探究という言葉自体がほとんど知られてない状態でした。そんなときにリン・エリクソンのカリキュラムを知ったときに、うわあって思ってスタートしたんです。ただ、当初はもう見よう見まねですね。そもそも探究が何かよく分からないまま、Learning Creators' Lab っていう探究を探究するプログラムをスタートしました。

そのとき最初に相談したのが、今、軽井沢の風越学園にいらっしゃる岩瀬直樹先生です。その時点で、私のほうでは、子どものための哲学対話の普及をされている立教大の河野哲也先生、東京コミュニティースクールというオルタナティブスクールで当時校長先生だった市川力さん、国際バカロレアの普及をされていた坪谷郁子さんにはお世話になっていましたので、参画いただきました。

探究のカテゴリーに入りそうな学びを概観し、岩瀬先生の提案で、イエナプランとプロジェクトアドベンチャーもプログラムに入りました。私が探究の概念を育てて行ったのはその過程です。ということは、私、探究が何かしっかり分からないまま、探究のプログラムをつくっちゃったってことになります。しかも、SEL もそうなんですよ。あんまり分かんないのにつくってしまうんです。

ちなみに、今も私、探究の概念は日に日に変わるし、自分の過去の探究の考え方の浅さに、あーあって思ったりしています。

荒木 きょうお話ししてくれたのが、最新バージョンですね。探究に SEL、セルフアウェアネスが入ってくるような形っていうのが、一番アップデートされた形になるんですか。

藤原 そうかもしれないですね。探究のプログラムを地域の小学生対象にやっていた頃には、セルフアウェアなんて何も考えていませんでした。学校の授業が私自身つまらなくて、もっと楽しくならないかなって思ってたんです。社会人になってからのプロジェクトメイキングがすごく楽しくて、こういうこと学校でもできればいいのにくらいでしかなかった

と思います。リン・エリクソンの知識の構造を見たときに、私が社会人としてプロジェクトメイキングをしてきたそのやり方が、学校カリキュラムとして存在するんだっていうことを知って本当に驚きました。これだったら、教育外の私もできると思ってスタートした、そのくらいの感覚だったと思います。

荒木 企業で楽しかったことが学校でできるんだ。でも、学校って面白くないよねっていうところの差って何ですかね。

藤原 何ですかね。どうなんだろう。

荒木 教育と名の付くものが楽しくなくなる時ありますよね。

藤原 私の場合は、何のためにこれをやっているのか分からないときとかですかね。

荒木 目的が見えないとき。

藤原 そうだったかもしれないですね。

荒木 目的が見えないときに、やらされ探究なのかもしれないですね。ではやらされ探究とやりたい探究の話に移しましょう。

やらされ探究からやりたい探究へ

学生に探究の授業、総合の授業はどうでしたって話を聞いたときに、いわゆるやらされ探究みたいな言葉が出てくるんですよ。先生にこのテーマでやってください、こういう探究にしてください、枠が決まっています。それこそ、子どもの声が聴けないっていうような探究だと思うんです。じゃあ、それをどうすればやりたい探究、子どもたちがやりたいっていうような探究にやってくるのかっていうところ。ここ、今から考えないといけないだろうなっていう。スタートはやらされでも、だんだんそれがやりたいに変わっていったらいいのかなって思うんですが。

例えば、デシとかが内発的動機付けの話をする際に、自律という自分で選択できて、自分ってやればできるじゃんって有能感があって、しかも、自分のやっていることが誰かの役に立っているっていう関係性があったときに、一番やりたい、自分で動機付けできるようになるって言ってるんですよ。

確かにそうなんだけど、でもこの3つの要素、これだけかなっていう思いもあって。内

発的に動機付けられたら、確かに「やりたい」とはなるんですけども、やっぱりワクワクさとか楽しさとかそこがスタートにないと、いわゆる感情的にやりたいって思わないと、なかなかモチベーションって上がらないのかな。先ほど、市川力さんの話出てきましたけど、市川さんの「Feel 度 Walk」とか、すぐ効果を求める人からしたら、何これっていうようなことやるじゃないですか。とっても無駄な時間を過ごすじゃないですか。でも、その無駄な時間ってものすごく大事で。何をしてるか分からない。でも、なんか歩いていたらものすごく面白いものに出会えるかもしれないって、その無駄な時間を大事にするっていうのが、学校って枠だとやりにくいのかな。学ぶのにワクワクしたり楽しんだら駄目、もっと歯食いしばらなきゃ駄目みたいなマインドが、もしかしたら学校にはあったりとか。

あとは、課題設定が早過ぎると思うんですよ。探究のサイクルで、最初に問題の発見ってあるじゃないですか。でも、そんなすぐに問題って見つかるわけでもない。最初のサイクルのところが、いきなりもう、はい問題見つかりましたみたいな、そこにいくまでのところって、実はものすごい長いはずなのに、そこが本当に単純にされているっていうところも問題かなって思っています。私はデュイの影響受けてるので、「もやもやからすっきりいく」のが探究なんですけれども、そこに「ワクワク」が入らないと、多分やりたい探究にならないだろうなっていう感じがしてて。

この前、総合の最後の授業で「あなたは何マニア」っていうちょっとしたプレゼンを学生にしてもらったんです。そしたら、みんな自分の推しのこととか、ものすごく話すんですよ。私はこのアイドルが好きです、キャラクターこれ好きですとか、服にこれだけお金かけてますとか。自分が沼ってることについて、ものすごいしゃべるんですよ。それに対しては、もう僕、いろいろ歩きながら微笑ましく見てたんです。その1週前は、自分のつくった探究プログラムをプレゼンしてくださいって授業したんです。そのとき、学生のみんなすごい真面目な顔で、しかめっ面しながらプレゼンするんです。

本質は探究って一緒なはずなんです。自分が沼ったこと、どんどん沼になって調べていく、それがめっちゃくちゃ面白くてたまらないっていうのが探究のはずなんですけど、沼についてはすごいここにこして、自分の探究

プログラムはすごい真面目な顔してしゃべる。多分この差が恐らく、学校っていう枠に入ったときに、ちょっと真面目さになってしまうところなのかな。でも、本質は一緒だと思うので、そこをなんか楽しくなるようなきっかけをどうしたら見つけれられるのかなっていう問いかけで、大学の授業は終わったんですけどね。そういう探究におけるワクワク感とか無駄な時間っていうのは、なんか感じるころってありますか。

藤原 わくわくしないとか停滞するということに、子どものほうがいろんなことを見抜いてるんじゃないかっていうふうに思うことはありますね。「この先生、実は探究分かってないのに、やれって言われてるからやってるんだろうな」っていうのを実は見抜いている。それはヒドゥンカリキュラムですよ。上から言われたから本当はやりたくないし全然しっくりしてないんだけど、取りあえずやれと生徒たちに強いている。こうしたことに、子どもは気付いてんじゃないかと思うんですよ。

とはいえ、言われたことはやらなきゃいけないっていう現実の中でどうするかっていったときに、奈須先生なんかも「総合の時間だとか探究の時間っていうのは、失敗していい時間として取ってるんだから、失敗してみればいい」っていうふうにおっしゃってました。実際、アメリカでは、探究の時間とか総合の時間って、別枠ではないんですよ。だからそういう時間があるのであれば、失敗するっていうことも込みで探究してもいいと思います。

例えば「やらされ探究」について探究してもいいのでは？「こんなふうに言われているけれど、モチベーション上がらないのはなんでだろう？」って。子どもって、オーセンティシティーをすごく求めてきませんか？特に中学生ぐらいになると。大人ってここではこう言ってるのに、あそこではそう思ってるよねっていう欺瞞を見てるから、そこを突いてあげると、多分もうちょっとワクワクっていうか、分かってくれるのではないのでしょうか。むしろ開示してしまったほうが、オーセンティックな学びになってくかなと思います。

荒木 そのオーセンティックなところというと、例えば LCL (Learning Creators Lab) のプログラムって、どんなことするんですか。

オーセンティックなこともやりますよね。

藤原 オーセンティックって言うとかっこいいですけども、実際はぐちゃぐちゃなんですよ。

荒木 LCL って、どんなことしているんですか。LCL の説明も踏まえてちょっとしていただいたらありがたいです。

藤原 LCL は 3 月末ぐらいにスタートして、夏休み前ぐらいまでは、探究にカテゴライズされるさまざまな理論や方法を実践者からワークショップなどの形で学んでいきます。それこそ概念型カリキュラムもやるし、アメリカのハイ・テック・ハイの先生に来てもらって、PBL のワークショップもします。生活総合については、例年長野県にある伊那小の先生方に来ていただいています。あと、イエナプランの先生方にも数年来ていただいていた。子どものための哲学は、実際に対話を実践します。

こうして、いろんな方法があることを概観しますが、実は、それぞれの方法をマスターする時間は当然ないんですね。それぞれ 4 時間ぐらいしかないから。なので目標は、参加者がプログラム期間の 8 ヶ月の間にそれぞれ、自分がどのタイプの学びに一番しっくりするかを見極めてもらうことです。私はたまたま概念型カリキュラムが大好きでしたけれども、市川先生のやるような **Feel 度 Walk** が好きな人もいますし、哲学対話がすごくフィットして、それを学校の教室に導入する人も沢山います。それでいいと思っています。むしろ概念型はあんまり人気がないほうかもしれません。ちょっと難しく感じるのかもしれませんがね。

荒木 確かに難しいですね。

藤原 そして、さまざまな方法と理論を概観したら、夏にチームビルディングをして合宿。これは山にこもって、プロジェクトについて考えるだけではなく、みんなで釜でご飯を炊き、沢で遊び、寝袋を並べて寝ます。それが終わったら 11 月もしくは 12 月の最終発表に向けて、5 人一組のチームをつくって、教育者がプロジェクトメークをしていきます。

荒木 参加者って教師が多いんですね。

藤原 ほぼ全員教育に関わってる人ですね。ただ、公立・私立学校の教員だけではなく、民間教育者、企業や行政の方、学生、研究者、保護者の方もいます。

荒木 自分の教師としての在り方みたいなの見つめ直すことって、結構多いんですか。

藤原 LCL は体を動かしながら学ぶ活動的なプログラムなので、見つめ直す時間が少なめかもしれません。静かに自分を見つめる時間を持つてるのはどちらかというと SEL のプログラムのほうです。このプログラムでは、瞑想もします。

荒木 リフレクションとかするんですか。

藤原 LCL のほうですか。LCL は簡単なオンラインリフレクションはしますが、十分に時間がとれていないのが実は課題です。先生方も皆さん感じてらっしゃると思うんですけども、とにかく時間が取れない。そういうジレンマは、私も抱えていて。

LCL は学校のクラスサイズに大体合わせて毎年募集は 36 名、時間数も合宿を除いて 40、50 時間くらいでしょうか。そんな長い時間ではないんです。やみくもに時間を増やすと、できることは増えるけれども、現場の感覚から離れてしまう。なので、敢えて制約の中でやってるっていう感じです。

荒木 でも、それだけいろんなプログラムがあって、いろんな教育手法を学ぶ中で、先生がの「教育観」は揺さぶられるでしょうね。教育観っていうか、こういう教育あるんだっていうところに入ってく人もいるかもしれないし、これでいいんだっていうところもあるかもしれないし。自分のやり方をちょっと客観視して、もっと別のやり方試してみようとか、そういう時間になるのかなと思いますよね。

藤原 そうですね。「アクティブラーニング」って言葉がありましたけれども、問題がもしあったとすれば、現場に定義がしっかり伝わっていなかったことでしょうか。体だけ動かせば「アクティブ」ではもちろんなかったと思うんですよね。やっぱ心も存分に動かさなきゃいけないし、頭も働かなきゃいけない。そのバランスっていうのをやっぱりプログラム設計側としては考えます。LCL に関してい

えば、頭だけではなく、心と体もいっぱい動くようにするためには、どうしたらいいのかということを常に考えてます。

探究と善さのかかわりについて

荒木 それでは次のテーマいこうかなと思います。私と藤原先生が一昨年「探究×道徳」というイベントをしたんですが、そこで探究における善さっていうところに焦点を当てて、この2つがどう関わるのかお話をしましたね。

道徳の授業は基本的には自己を見つめるところをすごく大事にするんです。まず道徳科の目標で、自己を見つめ、多面的・多角的に物事を考えていう形で、自分を見つめるっていうこと。自分と道徳的価値の関わりっていうの非常に大事にする。そういう特徴があるんですけども、その一方で、これからエージェンシーを発揮していくとなると、いかに社会に働きかけていくか。チェンジメーカーとしての自分、社会に働きかけていく行為主体としての自分っていうのがあるので、社会改革をしていくっていう視点がすごく大事になってくるんです。でも道徳に関しては、現時点では自己を見つめるってところに収まっているんですよね。人間の内側に視線が向くってというような形の教育になっている。

一方、探究のほうはどちらかというと、社会変革のほうに視点は重きを向いていて、恐らくそこにセルフアウェアネスっていう、SELが入ってきて、取り入れて、自分っていうのを見つめるような形になってきたのかなって感じで。僕、教育によってはどちらも必要だと思うんですけども、その辺りですよ。探究と善さっていうこと、どう関わらしていくのかってところが一つの今後のポイントかなって。特に、ウェルビーイングってのが今からの学習指導要領ではすごく言われると思うので、ウェルビーイングと探究ってどう関わるのかなってところです。もし何かアイデアとか考えとか思い付くことがあれば、道徳とウェルビーイングとか、道徳と善さとか。それらの関わりとかちょっとアイデアがあれば、聞かしていただきたいなと思います。

藤原 「幸福」というと、アリストテレスのことを思い出します。やっぱり最大の目標は幸福だと思いますし、その中でも、善いことをしてるときに幸福感を感じられるような人間を育てていくべきというメッセージは、す

ごく大事なことだと受け取っています。

例えば、この家で泥棒しようと思って鍵をどうやって開けるかを試行錯誤するのも「探究」といえるかもしれません。核開発もそうだと思いますし、さまざまな倫理的な問題があったとしても、研究自体が目的化し、そこに熱狂的になってしまうっていうことだってあるわけですよね。なので、探究の向かう先が、倫理的であり、それが本当の意味での幸福につながるかということがすごく大事なことだと思います。その中にやっぱり、さっき言った自己・セルフ、自己への気付きてこととも関連してくるのかなというふうに思っています。

荒木 探究って、何にでも使えますもんね。

藤原 何にでも、悪いほうにもいくらでもいけますね。

荒木 悪いことにいくらでも使えますよね。鍵の開け方もそうですよね。人のだまし方もそうですもんね。

藤原 そうですよ。

荒木 詐欺師ってすごいですよね。

藤原 多分、すごい探究心です。戦争での兵器の開発なんかもそうだと思いますし、それこそ捕虜になった人たちをどういうふうにして言葉を吐かせるかの方法を考えることも、探究といえは探究なので。そこは本当に倫理感が問われるところだと思います。

荒木 どの先生もそうだと思うんですけども、我が子、教え子に罪を犯してほしくないじゃないですか。それは別に10代であろうが20代になって、30代になってでもそうなんですけども。その歯止めっていうところに何とかして関わらないといけなくなっていくところはあるんですけど。でも、じゃあ、どうしたらいいんだろうかっていうところなんです。一番難しいなと思うところです。

藤原 正確な話ができるか分からないんですけども、江戸時代までは儒者など、いわゆる人間性としても格が高く、知識もある人が、教育者として認められていたと思うんです。この先生に学びたいという選択権が学び手にもありました。その中で教師の姿のようなものが重要視されてきました。それは身体とし

ての姿も含め、憧れを持って受け止められるような人の中に存在していました。そこに弟子入りして、知識および人間性を培ってきたということがあったと思うんです。でも、それが明治時代になってから、プロイセン型の教育、国家のための教育が差し込んできました。今は国家のカリキュラムを上手に教えられる人が教師として認められます。そこにどうやって人間性を捉えていくのかということとは、それこそ伺ってみたいですね。

荒木 例えば、ハイ・テック・ハイの教育に大きな影響を与えているロン・バーガーが、この前ワークショップしていただいたとき、こんなこと言ってたんですよ。「人生において人間は、人間性、キャラクターとかヒューマニティーと仕事の質で判断をされる」。決してテストの点数で評価されたりするわけではなくて、キャラクターとか仕事の質。ではそのキャラクターはどうつくられるのか。多分、僕はキャラクターは仕事の質によってつくられると思うという文脈かなと思ったんですけども。

じゃあ、その仕事の質。つまり、何の仕事に就くかではなくて、その自分が行ってる仕事に対する向き合い方っていうところで判断されるけれども、じゃあ、それはどうすれば高められるのかっていうところに、多分この本のテーマですよ。ビューティフルワークスっていう、「美しい作品」をどう作っていくのか。卓越性とかエクセレンスの倫理って言われてるものですけども。美しい作品を作っていくっていうことに一つ、仕事との関わり方ってとこにつながるのがあるかもしれないし、それが、さらに自分自身の人間性みたいなところですよ。キャラクターとかヒューマニティーってところにつながってくるのかな。

だからこそ、多分ロン・バーガーは学校教育において、子どもたちが美しい作品を作るところに特化していったのかなって感じはするんですけど。おそらく、美しい作品っていてもピンと来る人があんまないかもしれないので、ぜひ、これの監修をした、さとさんから美しい作品についてどういう意味なのか説明していただければと思います。

藤原 一つ思ってるのは、ティーチングにおいては、ティーチする対象を教師はよく知っているっていうのが前提ですよ。一方で、探究の場合は、教師の知識や技能を超えるも

のを子どもがつけることがある。そこが大きな違いではないかと。デューイは、美術館にあるような芸術作品じゃなくても、日常の営みであっても十分にアート足り得るんだって言ったと思うんですけども。そういう子どもたちの営みをどういうふうに評価するかが問題です。さっき言ったように、子どもが教師を超えてしまうときの評価が課題です。探究学習の要は実は評価だと思ってるんですけども、ロン・バーガーが推奨してるのは、共同批評なんですよ。

ロン・バーガーには批評の三つのルールがあります。子どもたちが作る作品をを親切に（Kind）で、助けになり（Helpful）、具体的（Specific）

に批評することです。対象は、作品なのか、プロジェクトなのかは分からないけれども、それを作る過程で、プロジェクトなり作品を共同で批評する力を付けてくんですよ。

この三つの批評のルールはデューイの鑑賞（Appreciation）の概念と響き合っていると私は思っています。作品をディプリシエートしないってことですよ。誰かが真剣に作っているものに対して、ポジティブにアプリシエートする。そうした共同体の態度の中で、学び手は言葉を育てていきます。結果として、自分の作っている作品に対しても、批評ができるようになる。自分の営みに対する言葉が豊かになってってことをロン・バーガーは、自己を知る、もしくは自己を承認するという過程で求めているんですよ。

もう一つ言うと、ロンが言うのは、どんな人生が幸せかっていうと、美しく誇らしい作品をどれだけ作れたか、どれだけ美しく誇らしい人生を営めたか、それが幸福につながるかということです。「誇らしい」思えるための言葉をつくり、支えるのが（温かい）共同批評なんですよ。それは教授（Teaching）における評価のベクトルとは逆向きのものです。自ら学ぶ中で、自分の学びや自分の作品について、自分のことを自ら語れるっていうふうに変えていくんです。



荒木 きょうの講演のテーマですね、共同批評っていうのが。探究って個人で収まるものではないですからね。お互いの共同。それは共同っていうのが、批評っていうクリティックっていう、決して批判するわけではない。チョウチョの絵がどんどん美しくなっていくのは動画で見ましたけども。結局、そういうところから人間性っていうところ、ロンの場合は美しい作品が生まれてくるっていうことになるんですよね。決して、それはファインアートとしての美しさではないですよ。上手に描くとかではないですよ。

藤原 日本でいえば、民藝的なものなんかも入ってくるかなというふうに思います。

荒木 結構、美しさって丁寧さとつながるところがあるのかなって感じはしたんですけども。

藤原 丁寧さを評価することもできますね。あと例えば、必ずしも手が器用じゃない人がつくった何か、素敵なアイデアが込められてたとしたら、それをやっぱりアプリシエートしてあげていいものですよ。そういう優しさみたいなものが共同批評の中で生まれていくといいなっていうふうに思ってます。実際、その現場は、非常に温かいものかなって思います。

今の世の中 社会の分断 民主主義とDE&I

荒木 では最後の話題に進もうかと思えます。これからの世の中を考えていく大事なトピックかなって思って準備しました。本当に社会の分断がひどいなと思って。民主主義という名の下に、民主主義によって民主主義を壊してるんじゃないかっていうようなことも感じるときもありますし、意見の相違っていうのを基本的に認めないっていうようなものであったりとか。D&I も一方では言われているんですけども、また一方ではすごく揺らいでるんじゃないかなっていうイメージもあります。現実には、逆行してるんじゃないかなっていうのを感じています。学校教育では民主的な価値ってあらためて伝えていく必要があるし、逆にそれを伝えれる場って、もう学校しかないのかなということも感じます。学校の中でDI もそうですけども、そういうことを伝えていく役割がすごく強いのかなって本当に最近感じるんですよね。特にD&I はさとさんが実践しておられますし、ちょっと探究とは離れ

るかもしれないんですけども、学校教育が持っている役割ってどういうところにあるって考えていますか。

藤原 私、もともと政治学科卒なんですけれども、デューイの『民主主義と教育』を読んだときに、すごく感銘を受けて。生活様式としての民主主義は、私が学んできたような政治体制、議会制度、投票行動など、そういうシステムの話とは全く違っていました。日々の身近なコミュニケーションから立ち上げていく民主主義っていうのは、今日からでも明日からでもできること。また、教育の現場で起きていることだなというふうに思いまして。もちろん家庭やコミュニティーでもできます。ただ、人に対するコミュニケーションを学んでいく場としては、やっぱり学校ってすごく大きいのではないかなと思ってます。

荒木 democracy as a way of life ですね。僕も1年に1回ぐらい読み直したりするんですけど、すごいこと書いてありますよね。『民主主義と教育』って。

でも、あれをどう伝えていくのか、どう守っていくのか。多分それは子どもたちの「声」だと思うんです。きょうのご講演の中にもありましたけれども、声っていうところに耳を傾けていく。だから、自分自身の声もそうですし、子どもたちの声のところもそうですし。その声に耳を傾ける態度そのものが、結構デモクラシーにつながるところなのかなって感じもします。

藤原 三権分立の三権への信頼が今揺らいでいませんか？今、司法はまだ信頼されているけれども、政治や行政に対する信頼は結構厳しい状況にあって。今、第四の権力と言われるマスコミに対する信頼がものすごく揺らいでますよね。民主主義って、信頼がないと成り立たないって、私、すごく思っています。

だから、近代はかなり危ういといったとき、そうしたシステムが制度疲労を起こしている、そこに信頼が置けないんですよ。だとすると、もう本当に身近な所から自分に対する信頼であるとか、身近な人に対する信頼を培えなければ、ものすごく厳しい時代に入ってるなっていうふうに思っています。だからこそ、小さな民主主義を培う場としての学校教育が担う役割っていうのは、すごく大きいのではないかなっていうふうに思ってます。

荒木 ありがとうございます。では、残りが 10 分程度なんですけれども、フロアのご質問等募集したいなと思います。フロアでご質問できる方、挙手のほうお願いします。

参加者 A 子どもの教育とか非常に興味があって、きょう楽しく聞かせていただきました。ありがとうございました。

さとさん、横に何々主義っていうふうにいろいろ書かれて、知識の位置付けとか、ああいう表を見せておられたと思います。僕の疑問が、教える側があのだの主義に相当する考えをベースに持ってるかによって、プログラムを何か実装したり行動していくときに、大きく受ける側が影響を受けるような気がするんです。なので、知識が社会的変革を求めるベースのものであると一番右に書かれてたものを考える方がこういう探究をやられる場合と、一番左のものをベースとして考え持つ方が探究やられる。それでまた子どもたちが受ける印象といいますか、そのプログラムの中でどう育っていくかっていうのが変わるように思うんですけども、主義とこういう探究の関係といいますか。個人の先生がたが持つ主義ですね。そういうものが関係したりするのでしょうかという質問です。

藤原 ありがとうございます。大事なご質問いただいたなというふうに思っています。子どもの個性を大事にするのであれば、教員一人一人の個性も大事にされるべきだというふうに私は思ってます。だから、探究をやるのであれば、自分がどんな探究者であるかということを確認した上で、実は自分の好きな探究やってしまっていていいというふうに思ってます。

私だって、概念型探究が比較的好きなので、それを作り続けてきました。苦手なものを無理してやるよりは、自分がじっくりくるものをやっていくっていう余地が学校教育に出てきてほしいです。それは探究に関わらないと思ってるんですね。実は私、教えてもらうことも結構好きだったりします。

あとは例えば、うちの娘、今、高 2 ですけども、一母としての意見でいえば、小学校から高 3 までの 12 年間に会う教師全員にばりばり探究だけやってもらいたいかって、そうでもないです。さまざまな先生に出会ってほしいと思っています。その中に、すごく熱量持って話す先生もいたりとか、教えるのがすごく得意な先生もいたりとか。だから、カ

リキュラムの自由度も本当のこと言うと、もうちょっと増えてほしいなっていう個人的な思いはありますけども、今の制度の中で、自分らしさを、教員も追求していったいいのかなと思います。

ただ、そのときに教員もメタ的に見て、他にもいろんなやり方があるということをもう少し積極的に見ていきつつ、やっぱり「私はこれが好き」と判断できたらいいですね。

荒木 どうでしょうか。いろんな教員の個性ってありますし、教職大学院って別に金太郎あめみたいな感じで、どこ切っても同じ規格の先生をつくりたいわけじゃないんです。それぞれの先生が持ってる特性っていうか、特徴っていうか、キャラっていうか。それを全面に発揮できるような、そんな先生になっていただきたい、教師になっていただきたいなというふうには思っています。

参加者 A いろんな先生がたに会ってもらいたっていうご意見、非常に重要だなと思います。僕も大学で授業をやっていて、1 回生向けに 10 人ちょっとぐらいで、新しいプロジェクトをつくってくださいっていうことやってるんですね。そのときに、教員が 5 人いるんですよ。それも生物学者 2 人と科学者が 3 人とか、数学者が 1 人とか、そんな感じでやって。最初授業つくるときに、教員だけで言ってたのが、「全員が意見が違うっていうことも学生に見せていいんじゃないか」って言ってたんですね。バックグラウンドが違う人間が一つのことに対して異なる意見を持ってるっていうのもぶつけて、何かそこは統一的にやる必要はないんだろうという考えで授業スタートして 6、7 年たったりしました。毎回もちろん学生さん違いますんで、リアクションが違うかったり、個別のプロジェクトが出来上がっていくようなのがあって、どれが自分の持ち味であったり、どういう考えを持ってるかっていうのがあって、それが良し悪しではなくて、私はこう考える人ですと。違う人も受け入れてっていうのを若い人に見せていって、自分はどれなのかなと思ったり、二つ三つを融合した考え方だなとか、社会に合わせていって、どれを引き出しを出していくかっていうのも、また 10 年後 20 年後 30 年後、変わってくる可能性があるんで、やっぱり教育の現場っていうのは、いろんな考えを入れていって、今の私はこれが一番かっていうのがいいんじゃないかなっていうふう

思ったりしました。非常にきょう面白かったです。ありがとうございます。

荒木 いろんな立場の先生が一つの授業をつくり上げるって、すごい面白いですよ。でも、その教員同士がお互いの教育領域に対してリスペクトを持ってるから多分成り立つので、そこでマウントの取り合いになってしまったら、多分授業成り立たないですよ。相互のリスペクトっていうのがあって、授業って成り立つのかなって感じがしまして。そうになると、学生はメリットしかないですね。どれが自分にとって合うんだっていうことを探しながら、誰が正しいんだろうじゃなくて、それを合わせながら正しさっていうの考えたり、善さを考えたりとか、妥当性を考えたりできるので、素晴らしい授業だなと思います。ではもうお一人のご質問をお願いします。

参加者 B きょうはありがとうございました。本当に納得で、特にそうだなと思ったのが、自分を知らないと他者のいる所でよい実践ができない。だから、自分の声を聴くって、もう本当にそのとおりだなと思って。自分のことは何も分かんないまま、いろんなとこ手伸ばして、外だけ何かいいとこ取りしてったら、結局ぼろが出るってよく言われると思うんです。

だからこそ、自分のことを知るって大事だと思います。ただ先生たちって、こういう研修ってあんまないと思うんですよ。教科教育とかはよくあると思うんですけど。そうなってくると、公立って、どこでこれを学んでいけばいいのかなと思っていて。これが教育委員会から振ってくる研修になってくると、またやらされ研修ってなっちゃって、嫌になっちゃうとかありますよね。どこで学んだらいいかなって。好きな人は自分のことなので自分でもやるんですけど、必要性に感じないっていうか、自分の声聴かなきゃいけない必然性がなかなかない人が多いと思うんですけど、どうやって学んだらいいのかなっていうのがちょっと質問です。

藤原 LCL そのものは、半分近くは公立の先生に来ていただいています。金額的にも公立価格として、ちょっと下げてはいるんですけど、それでも助成を全く得ないでやっているプログラムなので、決して安くはないですよ。

このプログラムは、今年9年目ですけど

も、特にコロナの以降の先生たちの忙しさが半端なくて、後半のプロジェクトがしんどそうだなって思ってます。この10年でもこれだけ変わっちゃうんだっていうのが、実は実感ですね。

時々こういうふうに話を聞きに来てくださったりするの、すごいうれしいし、研修に来てくれるのもすごいうれしいって思いつつ、「休んだら？」って思うこともなくはないんです。すぐ答えられなくてごめんなさい。

荒木 僕は自分の声を聴くのはものすごく大事だと思うんですけども、でも、自分の声を聴きなさいよって言っても、聴きたくない人は絶対聴かないんですよ。自分に向き合うって、すごいしんどい作業でもありますし、向き合うためには、ある程度その場も設定しないとイケませんし、向き合わせることによって、開けなくていい蓋を開けてしまっただけ、ものすごくしんどくなってしまう場合ももちろん考えられるので、僕は一律に全ての先生に、こういうふうに分身に内省してくださいって言うのが、ちょっと怖いところが実はあります。向き合わなければならない時期って多分、人それぞれのステージであると思うので、そのときにLCL行っていたりとか、教職大学院の扉をたたいていただくとか、そういう形にさせていただいてもいいのかなと。まず必然性を感じてもらふことのほうが大事なかなっていうふうに感じてます。本当に内省ってすごく大事なポイントだと思うんですけど、どうでしょうか。

参加者 B ありがとうございます。本当に大事だからこそ、何とかしたいなって僕も思ってるんですけど。心病んで職場離れてしまう方って、1回ここ通ると割と強くというか、保ちやすいと思うんですよ。自分のことが分かって、自分の弱みも分かって、今こういう状態だなんて気づきやすいので。だからこそ、やっぱりここ通ってほしいので、何とかより広く必要性に応じてできるように、ちょっと考えたいなと思いました。ありがとうございます。

荒木 まずはマインドフルネスをちょっとやってみるとかもいいかもしれないですね。そこから内省ってところに入っていってもいいのかなって感じはします。

藤原 これに対してちょっとだけコメントす

ると、まさにマインドフルネスで呼吸整えることの意味を感じている一方で、やりやすいと思うのがジャーナリングですね。私もやっています。毎日やろうとすると辛いので、しんどいとか疲れたとか、嫌なことあったとかっていうときに、私、スマホでちょっと吐くみたいなのをやっています。ジャーナリングは、ネガティブな自分の声を聴くっていうことでもあるんですよね。こうやって整えてかないと日常が結構厳しいっていうのが、昨今の教員の状況かなっていうふうに捉えています。

荒木 ありがとうございます。まだご質問あったかと思うんですけども、ここでいったん打ち切らせていただきます。

では最後に、これから先生になる人、あるいは現在、先生の方が結構きょうは聞いておられると思うので、最後一言メッセージをいただいて、それで終わりにしたいと思います。

藤原 私、もともとビジネスや政策の世界にいて、経営者やエンジニア、医療従事者の方たちとお仕事をしてきました。けれども、教師の仕事ってめちゃめちゃ魅力的だと思ってるんですよね。子どもたちを育てる仕事であり、なんでも取り扱っていいですし、心も身体も、全人的に見ていくっていう、もう全てやっていいっていうぐらいの広さもあります。

非常に魅力的な仕事で尊敬しています。未来の子どもを育てるのは、とても大切な仕事だと思ってますので、日々心身を健やかに保ちつつ、子どもたちに向き合っていただけるとうれいになって思っております。ありがとうございました。

荒木 では、藤原先生にもう一度大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。

<会場からの質問>

フォーラム当日に取り上げることができなかった参加者の皆様からの質問に、この場をお借りしていくつかお答えしていただきました。

問い 1：self-awareness の大切さは大変理解できます。知らずに人を傷つけることもあると思います。ただ、最近、担任側（特に学び続けて気配りができる人）ほど、気にしすぎて話が出来ない、淡々と授業を進める方向に進んでいる気がしています。これは先ほどの探究的な学びから遠のいていると思いますが、いかがでしょうか。

藤原さとさんより

担任の先生が気にしすぎて話せない理由はいくつかありそうです。どちらになるでしょうか？

- ・教師が十分ケアを受けておらず、疲れている（組織の問題）
- ・教師が人を傷つけているのではないかと迷うが知識がない（研修の不備の問題）
- ・教師がセルフアウェアネスに向き合う時間、研修を受ける時間がない（組織の問題）

おそらく、複合的なものだと思いますが、どのどれをもすぐに解決できない場合には、朝やクラスのスタート時にサークル対話やチェックインなど、生徒たちが声をだせる場所を多く作ってみることをお勧めします。言葉遣いの小さな間違いや正しさよりも児童・生徒との関係性の構築が先で、お互いに過ちを赦せる関係性ができてくるとやりやすいと思います。ポリティカルコレクトネス、という言葉がありますが、まさに「ポリティカル」に正しいだけで、言葉本来の意味や機能として正しいかどうかという疑問に思うことが私自身あります。あまり囚われすぎると言葉を発することができなくなるので、注意が必要です。

問い 2：教師はマジョリティ性を意識することが大切であるというお話がありました。ただ、意識するだけでは実際の行動は変化しにくいのではないかと考えています。また、マイノリティ側に配慮できないのは、「意識できていないから」という理由で片付けられるような気がしています。意識で終わらせない為には、どんなアプローチが考えられるでしょうか。

藤原さとさんより

厳しい回答かもしれませんが、本当に意識できていれば、マジョリティとしての自分が他者に強いてきた抑圧や暴力を赦せないという感情を持つはずです。もしくは何もしてこなかったという羞恥心です。そうした感情が伴えば、なんらかの行動に移るのが人間というものではないのでしょうか。もし、行動に変容が起きていないのであれば、自分の意識変容が不十分であるかもしれないと考え、もう少し踏み込んで省察することが必要かもしれません。「マジョリティ」の理解が概念理解に止まっている限りは、行動を変えることが難しいと考えます。

問い 3：高等学校の教員をしています。SELを高めていく活動は学級づくりや日々の生徒指導かかる役割も大きいように感じます。

「SEL→探究」のベクトルがお話しの後半の中心だったように感じますが、逆の「探究→SEL」になるような探究のありかたとはどのようなものなのでしょうか…？荒木先生の道徳教育の観点も加えて伺いたいです。

荒木寿友より

藤原さとさんのお話から考えると、探究という学びを進めていくにあたっては、自分自身を深く見つめていくことが不可欠であるという中でSELのSelf-Awarenessを取り入れているという流れだったかと思います。倫理観や道徳という観点から探究を考えたときに、自分たちのやっている探究は誰かの役に立っているのか、誰かを幸せにしているのか、あるいはこれによって誰かを不幸にしまわないのか、という見方を加えてくれるのが、倫理や道徳の役割ではないかと思います。つまり、探究とSEL、ないしは道徳の関係は相互補完的な関係で、両者のつながりが自覚的になされた教育実践が行われたときに私たちのウェルビーイングが達成できていくのではないかと思います。